

Kenji Yoshida

J'ai, quelque jour, dans l'Océan,
(Mais je ne sais plus sous quels cieux)
Jeté, comme offrande au néant,
Tout un précieux...



Qui, pour quelqueur ?
J'obtiens le vin ?
Peut-être de mon cœur,
Songeant au sang versant le vin ?

吉田健一集成

Sa transparence accoutumée

Après une rose fumée.

批評 I

Reprit aussi pure la mer....

Perdu ce vin, iras les ondes!...
J'ai vu bondir dans l'air amer
Les figures les plus profondes....

吉田健一集成

1

批評 I

新潮社

Kenichi Yoshida

吉田健一集成

I

[第5回配本]



発行…………一九九三年一月五日

著者…………吉田健一「よしだ・けんいち」

発行者…………佐藤亮一

発行所…………株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話 営業部〇三―三三六六―五一―

編集部〇三―三三六六―五四―

振替 東京四一八〇八

印刷所…………凸版印刷株式会社

製本所…………加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが、小社読者係宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

吉田健一集成・1 ■ 目次

英国の文学

I	英国と英国人	11	9
II	チヨオサアとマロリイ	16	
III	エリザベス時代の文学の成立	23	
IV	シエイクスピア	28	
	十四行詩	28	
	「ロメオとジュリエット」	31	
	「ハムレット」	38	
	「ヴァイナスとアドニス」	30	
	「リヤ王」の嵐の場面	44	
	「嵐」	48	
V	形而上学派の詩人達	55	
VI	英国の宗教文学	64	
VII	十八世紀の文学、——英国の小説	71	
VIII	浪漫派の詩	85	
IX	十九世紀の文学	99	
X	その後	111	

シェイクスピア

エリザベス時代の演劇

「ロメオとジュリエット」

「真夏の夜の夢」

フォルスタフ

「十二夜」

十四行詩

「ハムレット」

「オセロ」

「リヤ王」

「マクベス」

「アントニイとクレオパトラ」

「嵐」

119

121

128

138

141

147

154

163

179

192

207

219

230

東西文学論

I 日本で文学が占めてゐる位置

II 日本文学とヨオロツパ

III 文学では何が新しいか

IV 文学の実感

V 小説といふ観念

英国の近代文学

I ワイルド

II シモンズ、ヒュウム

III エリオット

IV リチャアヅ、エムプソン、リイヴイス

V ストレエチエイ

VI イエイツ

VII エリオット

239

241

247

253

260

266

273

275

292

304

312

320

326

346

解
題

XII	XI	X	IX	VIII
ウオオ	ジョイス	ロレンス	トオマス、ルイス	ホツプキンス

吉田健一集成
1

編集協力
清水徹

英国の文学

For my Father

I 英国と英国人

英国の文学が英国のものである以上、我々は先づその文学を生じた英国と英国人に就て考へなければならぬ。英国は見方によつては、世界で最も醜くて住み難い国の一つであると言へる。冬は長くて、その寒さは格別であり、真冬になれば小鳥は雀さへもどこかへ姿を消して、偶に飛び廻つてゐるのがあれば、どこの水溜りも凍つてゐるので、食物よりも先に水を欲しがるのである。そして緑のものは凡て地上から消え失せて、後には建築と舗装道路が残つてゐるだけの鉱物の世界で寒さは雨を妨げず、雨は雪に変つていつまでも溶けないでゐる。さうでなく、てさへ日が短くて、午後四時にはもう暗くなる。又、さういふ環境に対して生活上の公共的な施設は我々には想像出来ない程貧弱であり、或は寧ろ、凡てが家庭生活を中心に組織されてゐるから、家庭生活を離れた娯楽機関とか、福祉事業とかいふものがどこか例外的な性格を帯びることになり、所謂、街の生活がそれだけで成立し難い。従つて、何かの形でさういふ自分の家庭生活がなくて冬にでもなれば、ただもうみじめである。

又、英国人は人種として美しくもあり、醜くもある。これは長い間、階級制度が厳格に守られて来た結果であつて、今日の

英国は所謂、福祉国家であり、凡てかういふ改革を行ふ時の英国人のやり方は徹底的であるから、これからの英国人がその生れた環境に従つて體質的にも左右されるといふことは考へられないが、それで過去の下層階級の生活までが改善される訳のものではない。その条件の悪さは予想外のものだったので、子供の時から環境も栄養も悪いから、それが体格にも現れて、例へば、平均して背が低いといふやうなことでその階級の間であることが解り、次に下層階級ではなくても、絶えずそれへの顛落を恐れて中流の身分に縋り付いてゐる下層中流階級、それから自分の生活力に自信を持つだけの余裕がある中流階級、又次にはそこから一步進んで上流階級になりました積りである上層中流階級があり、最後に、凡てさういふ人達に対して支配的な地位にある上流階級、といふのは、紳士とか、貴族とかいふ人間があつて、これは人中にあつて目立たないことが今日でもその信条になつてゐるから、一昔前までの英国では、例へばその荒涼とした冬の街や、そこを走る交通機関で顔を合せるのは醜い人間か、或はこれに同調して無表情な人間ばかりだといふ印象を受けた。そして冬の条件は、社会組織の改革で変へられるものではない。英語に日本語では訳しやうがない *gaunt, dreary, drab, grim* といふやうな、陰惨な現実を指す言葉が幾らもあるのは、さういふ英国人の生活の一端を示すものである。その冬も長くて、一年のうちの半分は確実に冬であるが、それが終つて英国に春が来るのは三月の末頃である。さうすると、それまで凍り付いてゐた地面が湿気を帯びて土が黒くなり、ク

ロカスの芽がその土を持ち上げて出て来る。小鳥が鳴き出して、最初に鳴く thrush といふ鳥を字引で引くと、鶇の一種としてあるが、例へば、blackbird を引いてもやはり鶇の一種となつてゐて、仮に日本種の thrush があつても、その鳴き声は英国の nightingale と日本の鶇位に違ふのではないかと思はれる。そして小鳥が多い英国で、鳥が一羽もゐなくなつたのも同然の冬の後でこの thrush といふ小鳥の声を聞く時、自分の心の廻りにも凍り付いてゐた氷が解けて来たやうな感じがする。又、秋には木が凡て落葉するのであるから、春になつて木が芽を吹くのも一斉にである。牧場が緑になり、三月の末から六月の半ばに掛けて英国の自然の美しさが増して行く有様は、それを見ても直ぐには信じる事が出来ない。「真夏の夜の夢」といふ喜劇の題の真夏といふのは六月の半ばのことで、シェイクスピアの妖精達を現実と区別するのが難しい位、美しい季節であつて、この英国の六月に匹敵するのは、色取りどりに紅葉した木々が柔いだ日光を浴びて立つ英国の秋だけである。

Tell me not here, it needs not saying,

What tune the enchantress plays

In aftermaths of soft September

Or under blanching mays,

.....

A. E. Housman: "Last Poems"

柔いだ九月の日差しに、
又、花咲く五月に、
あの魔女が弾く調べを

言はずとも私は知つてゐる。

.....

英国の詩の大部分は英国の自然を歌つたもので、ハウスマンの詩を引用したのは、無数の詩人の作品からその一例を選んだに過ぎない。といふことは、英国人が自然を愛する国民であるといふことなのであるが、それが英国の自然であるから、その夏に就て別な詩人が、

And summer's lease hath all too short a date:

又、夏の期限が余りにも短いのを何とすればいいのか。

と言ふ時、それがかうした切実な響きを帯びることになる。序でに、この一行が出て来るシェイクスピアの十四行詩の全文を(下)に挙げて見る。

Shall I compare thee to a summer's day?

Thou art more lovely and more temperate:

Rough winds do shake the darling buds of May,

And summer's lease hath all too short a date:

Sometime too hot the eye of heaven shines,

And often is his gold complexion dimm'd;

And every fair from fair sometime declines,

By chance or nature's changing course untrimm'd;

But thy eternal summer shall not fade

Nor lose possession of that fair thou owest;

Nor shall Death brag thou wander'st in his shade,

When in eternal lines to time thou growest:

So long as men can breathe or eyes can see,

So long lives this and this gives life to thee.

君を夏の一日に譬へようか。

君は更に美しくて、更に優しい。

心ない風は五月の蕾を散らし、

又、夏の期限が余りにも短いのを何とすればいいのか。

太陽の熱気は時には堪へ難くて、

その黄金の面を遮る雲もある。

そしてどんなに美しいものでもいつも美しくはなくて、

偶然の出来事や自然の変化に傷けられる。

併し君の夏が過ぎることはない。

君の美しさが褪せることもない。

この数行によつて君は永遠に生きて、

死はその暗い世界を君が迷つてゐると得意げに言ふことは出来ない。

人間が地上にあつて盲にならない間、

この数行は読まれて、君に生命を与える。

この詩には、漸く沈み掛けてゐて、いつかは沈むとも見えない太陽の豊かな光線が空中に金粉を舞はせてゐる英国の夏の黄昏がある。我々は東洋に生れて、かういふ濃厚であると同等に自然のままに美しい現実を、西洋の詩や音楽、或は絵を通してしか経験したことがない。それは、我々が英国の陰惨な冬を知らないことと違つてはゐなくて、例へば、英国の秋の景色にも前に触れたが、木が紅葉すると言つても、その色は赤と黄に限られてゐるのでなくて紫、茶、黄、赤などの色がまだ紅葉してゐない木の緑と混じつて秋の空の下に輝くのであり、それは満目紅葉といふやうな寂びれた印象を伴ふものではない。又、夏の緑も、それに劣らず何か現実とは思へない光沢を帯びてゐて、我々にはかういふ事実に基づいて次のやうに考へることが許される。

春から秋に掛けての英国の自然が、我々東洋人には直ぐには信じられない位、美しいならば、英国の冬はこれに匹敵して醜悪である。そして冬が十月に来る国では、この二つの期間はその長さに掛けて先づ同じであつて、英国人はかういふ春や夏があるから冬に堪へられるのでなしに、このやうな冬にも堪へられる神経の持主なので春や夏の、我々ならば圧倒され兼ねない美しさが楽しめるのである。何れの場合も、現実には堪へ抜く強靱な生活力がそこに働いてゐることに変わりはなく、例へば、ヴ

アレリイはテスト氏が如何に烈しい快楽の享受に鍛へられて来たことかといふことをテスト氏の生活態度に就て書いてゐるが、如何に美しいものにも對抗することが出来る忍耐力といふことが、英国人の国民性に認められる一つの特徴であると言へる。或るものを美しいと見るにも力がなければならず、それを美しいと見た上で更にそれを自分のものにするには、力が一層に必要なのである。

前には英国の下層階級に就てその生活の、或は曾ての生活の悲惨な面に触れただけだつた。併し例へば、ディッケンスはさういふ下層階級の生活を小説で書くのが得意であつて、そこで描かれてゐるものから我々は寧ろ逆の印象を受ける。G・K・チェスタアトンは、ギツシングがロンドンの中流階級の偽善に満ちた生活を象徴する「ベルグレイヴィア」区を諷刺しても、今日でもロンドンの至る所に「ベルグレイヴィア」区が残つてゐるが、ディッケンスがロンドンのオールド・フリイトの牢獄に入れられたものの状況を書けば、この牢獄は取り払はれたと言つてゐる。ディッケンスには、確かにさういふ社会改革に対する熱情もあつた。併し彼が描いたさういふ人物の群に対する愛着は、その原型と彼が同じ強健な生活者である点で一致してゐることから來てゐる。例へば、「クリスマススの物語」といふ彼の短篇集に出て来る人物の一人は、お茶の時間に食卓に並べられた食べものの山から茶受けになるさういふ食べものの種類を次から次へと想像して悦に入り、部屋の暑さも手伝つて脳溢血を起しさうになる。チェスタアトンは、英国の下層階級が冬

にやたらに石炭を焚いて、部屋をそのやうにゐたたまれない位暑くするのは、外の寒さを頭に描いてその対照を楽しむと言つてゐる。

これは、寒さを防ぐのが目的で部屋を温くするのは違つた心情を示すものである。誰も寒い思ひをするのが好きなものはないが、ここでは、寒さを相手に戦ふのが生き甲斐を感じることなのであつて、家にゐて寒さと戦ふには部屋の温度を高めることが自分の闘志の具体的な表現になる。それは競技の精神といふやうなことから更に遡つて、風波を冒して海を渡つて來た彼等の北歐の祖先達に想到させるものであり、これと同じ態度が彼等の生活をなしてゐる凡ての面に見られる。英国の下層階級は殊に濃い紅茶を愛用して、この習慣が祟つて胃潰瘍を起すものが多い。又彼等は、中身の絵よりも倍も幅がある金縁の額を買つて來て部屋に飾り、かうして彼等は貧苦と戦ふのである。そしてもしそこに悲惨なものがあるならば、それは彼等が一定の環境に置かれてゐたのでその環境に由來する無智が彼等にそのやうな生活態度を固執させたことにあり、例へばハアディイの「薄命なジュウド」は殊にその頃までは、仮にこの環境から逸脱した教養を身に付けた場合に起る他なかつた悲劇を克明に描いてゐる。併しさういふ英国の下層階級の生き方を支へてゐるものも、既に述べた英国人の忍耐力であつて、それ故に、この生き方も英国に特有のものであると言はなければならぬ。と同時に又、冬に堪へて生きて行くものが、必ずしも春に堪へる必要はない。それには無感覚であつてもいい訳であつて、英